

2009 年度

桐朋中・高等学校 P.T.A. 講演会

大江健三郎氏 講演
「言葉の力」
(要旨)



日時	2009 年 9 月 19 日(土) 午後 2 時～4 時
所	桐朋中・高等学校体育館
参加者	1325 人
主催	桐朋中・高等学校 P.T.A.
記録	高校第二学年 P.T.A. 委員
編集責任者	添田幸子
発行責任者	矢島治子



この講演要旨は、録音機材の不具合により音声記録を残せなかったため、大江健三郎氏の講演内容を、桐朋高等学校第二学年の P.T.A. 委員たちが書きとめていたメモをもとに、編集し、再構成したものです。

I 「言葉の力」のイメージ、さらにご家族のこと、桐朋との関わりなどについて

大江氏はまず桐朋学園とご自身の家族とのつながりについて述べ、ご長男の光さんが森の中ではじめて言葉を発した時のエピソードをまじえながら、「日常を超えた何ものか」という表現で「言葉の力」がどういうものかのイメージを語られた。

(要旨)

長男、光は 1963 年生まれ、長女は 67 年、次男「オーちゃん」は 69 年生まれ、これは『沖縄ノート』を準備していた時期であった。長女は桐朋女子、次男は桐朋中・高等学校で学ぶ。次男といえば、桐朋で大いに身体を鍛えたというエピソードが思い出に残っている。光が障害をもっていたために、世話をする私たち両親と一緒に次男も家にいることが多く、そのせいか彼は、運動の得意でない子供になっていた。それを知った家内が、とにかく昼食前に校庭を走るようにと息子に助言。次男はそれを素直に聴き入れて実行し、見事に効果はあがったことを、運動会で示してくれた。

また、光は幼い頃、野鳥の声にのみ反応を示し、人間の声、言葉には無反応だった。そこで日常的に、野鳥の声の録音に続けてアナウンサーが鳥の名をいうレコードをテープにとって聴くということをしてきた。それが、6 歳の夏、私が彼を肩車して森の中を歩いていると、聞こえてきた野鳥の鳴き声に応じて、彼が不意に録音テープのアナウンサーと同じアクセントで「クイナ、です」(*) とひとこと発した。これが、光が人間の言葉を発した初めであった。

その後、光は作曲をするようになったのだが、光がクラシック音楽に深く入っていったのは、日常を超えた何ものかによるのではないかと思う。

(*) 大江氏は講演時、野鳥の名前をおっしゃいませんでしたが、複数の著作の記述から「クイナ」といたしました。

II 加藤周一氏のこと、及び外国人とも議論できる「言葉の力」について

昨年亡くなられた「知の巨人」、加藤周一氏の言葉から、日本文化には「今＝ここ」主義という特徴があるとす。そして、外国人ナウマンとドイツで論争した森鷗外のエピソードを紹介。様々な相手との議論において、何がいちばん大事なのかを説いた。

(要旨)

日本人は、“過去—現在—未来のつながりの中での”「今」、そして“世界空間全体における”「ここ」よりむしろ、それらから切り離された自分たちだけの「今とここ」に関心を向けてきたと、加藤周一氏は『日本文化における時間と空間』(岩波書店)のなかで指摘した。そして彼は、生涯にわたり深い関心を持ちつづけてきた森鷗外—自身同様、医学者であり文学者であった—について論じている(『日本文学史序説 下』他)。



1884年、22歳でドイツに留学した鷗外は、ドイツ人地質学者で“ナウマン象”にも名を残すナウマンと、1886～7年に、二度にわたり論争をした。ナウマンが現地の新聞紙上に、日本の国土と民族についての一文を発表したのに対し、鷗外はナウマンに反論。相手の再論にさらに反論して、二つの文章を見事なドイツ語で書いた。ナウマンが日本社会の後進性を指摘するなどしたのに対して、反論を試みたのである。

加藤氏によれば、鷗外の反論には弱いところがあった。「しかし鷗外は相手を完全に理解すると同時に、自分の弱点を見抜いたに違いない。」(『日本文学史序説 下』「鷗外とその時代」より引用)。とかく日本人は、6割くらいの理解でも外国人とディスカッションしてしまう傾向があるが、それではいけない。たとえ相手が外国人であろうと、「相手のことは全部わかる、理解している」と言うことができ、堂々と議論ができるだけの言語力、「言葉の力」が必要である。

ちなみに、近く誕生日をむかえる次男のバースディカードにも、「相手を完全に理解せよ。同時に自分の弱点を見抜け。」と書き付けて贈ったところである。

Ⅲ 新しい困難を乗り越える力について

マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』を読み返すなかから、自分の内面に蓄積されている何かに気づき、それは自分の経験を通じて培われた「習慣」であることを、フラナリー・オコナー(米作家、女性 1925～1964)の思想に沿いながら説明された。

(要旨)

最近むかし読んだ本のうち、大事だと思って置いてあった蔵書を読み返すことも多い。この講演に来るまでも『ハックルベリー・フィンの冒険』を読んでいた。子供のときと中年の頃、そして今とでは、言葉や人間に対する理解力は変わっているだろうか？

以前読んだ本を再読してみると、人間に対する理解が進んでいるとわかる。わき起こる感情も、子供のときに覚えた感情とまったく違ったものではないが、深みが出てきていると思う。



オコナーの書き残したものを読むと、これまで出くわしたことの無い困難にぶち当たった時、それを乗り越える力となるのは「習慣」であることが読みとれる。「習慣」とは、たとえば仕事や読書の経験を通して、ひとりひとりの中で長い時間をかけて養われてきた内面の蓄積である。その「習慣」が、新しい困難に対した時、自らを押し出してくれる力（ポテンシャルティー＝潜在能力）となるのである。そういった「人生の習慣」、自分が生きるうえでの「習慣」を獲得することが大切である。

IV 勉強することの意味—シモーヌ・ヴェイユの言葉をかりて

“勉強するのは何のためか？それは注意深い人間になるためである。”—シモーヌ・ヴェイユ（仏哲学者、女性 1909～1943）の奥深いこの言葉を中心に、学ぶことの意味、そして隣人愛についても言及された。

（要旨）

シモーヌ・ヴェイユは、父はユダヤ人であったのだが、あまり知られていないがカトリックに共感を覚えていた。彼女は著作『神を待ちのぞむ』（原題：神への期待（『Attente de Dieu』））の中で、「勉強する」ことは“注意深い人間になるため”だと述べている。注意力をきたえることが学問の基本であり、同時にそれは神に対する祈りの力を育てることになると語っている。注意深くあることとは、人間の中心にすえるべきとても大事なことであり、それは注意力を集中して祈るのと同じことである。

そして、神への愛に最も近いものが隣人に対する愛である。具合の悪い人がそばにいた時、「あなたはどのようにお苦しいのですか？（*Quel est ton tourment?*）」（『あいまいな日本の私』（岩波新書）「癒される者」より引用）と問いかけること。この問いかけをすることが、人間にとっていちばん大切な態度であり、そのためには苦しんでいる隣人に一途な思いを込めた注意する目をむけることが必要である。メガネの小さなネジが、長年の使用でゆるんで落ちてしまった時、私は長い時間がかかっても何とかそのネジを捜し出すことにしている。たとえ2時間かかろうと、そのように注意深く集中することは魂にとって大切なことだと思う。

V 「憲法九条」のこと

最後に大江氏は、加藤周一氏らと活動を共にし、現在も深い関わりを持つ「九条の会」についてふれ、九条を守る意味について語られた。

(要旨)

それまで文筆活動に専念し、請われても集會等に出ることのなかった加藤周一氏が、80歳を過ぎてから「九条の会」の結成を呼びかけた。彼の遺志を私も引き継いでいきたい。

例えば、平和の問題をよく考えるアメリカ人が我々の活動について、「日本は核の傘に守られている。所詮、大きな暴力に守られた非暴力にすぎないのではないか？」と批判する。そのような時私は、「確かにあなたの言うとおりだと思う」と、まず答えるようにしている。というのも、その指摘はある意味あたっているからである。そういう自分たちの弱点を理解した上でなお、「世界の人権を守る」ため、憲法九条をつぶそうとする力に、私は抗していく。

教育基本法はすでに作り変えられてしまった。「九条」は5年後に残っているだろうか。もし「九条」がなくなったら、アジアはどうなるのか。人々が生き生きと暮らしていかれるのか。20年後30年後の日本のために、子供たち孫たちのために、私は「九条」を守っていきたい。



VI 質疑応答

講演の後、会場からのいくつかの質問に、大江氏は丁寧に答えて下さった。

(要旨)

・「自分の頭で考え自分の言葉で表現することができるようになるためにはどうしたらよいか?」「年頃の子供に表現力がないのは時代のせいなのか?」という質問には一。

「言葉」は自分のものであって時代のものではない。言葉を鍛えるためには、自分の言葉で考え、自分の言葉で書くことが大事である。自分の言葉を作り直し磨くために私は、いったん小説を書き上げてから、何度も書き直すことを習慣にしている。近く出版する『水死』という小説—父の死を扱ったものである—も、今そうやって仕上げをしているところである。

さらにまた、言葉一つ一つの知識があっても不十分であって、単語を使って短い文章を作ってみることが、良い訓練になる。「言葉」とは、単なる単語では終わらない。文法から人間へとつながるものだからである。

ところで一つ、私の失敗談を紹介する。次男が桐朋生のときのことである。ある日のこと、家族の寝静まった台所のテーブルに次男の書いたらしい原稿用紙数枚の文章があった。書かれたものは何でも書き直す習慣のある私は、それを読みながら、つい、赤でいくつかの修正をってしまった。そして、私も気持ちよく眠った。



ところが目覚めると、家内がカンカンになって怒っている。聞けば、テーブルにのっていた原稿用紙は、その日次男が学校に提出するために清書した視写の宿題であったという。更に言えば、書かれていた文章はあの、湯川秀樹博士のものであったのだ！

・「大江先生は日本語で小説を書いているが、外国の人たちとの間で言葉の壁が越えられたと感じたことはありますか？」という質問には一。

来月、台湾に行く。そこで台湾の作家と、中国から来る中国人の作家と、日本人の私とで、互いの作品を音読し、翻訳する試みを行う予定である。言葉の壁を越えるための実験的な試みになるだろう。言葉の壁は、乗り越えられるだろう。サイエンスの分野ではすでに乗り越えられている。

・「思春期の子供をもつ親が子供のためにできることは？」という質問には一。

子供を注意深く見るということ、見守るということがやはり大切であると思う。そしてヴェイユによれば、それは同時に、子供に「期待する」ということにもなるのである。

・最後に、在校生の「世界史を学んでいると暗い気持ちになってしまう。どうしたらよいか？」という問いかけには一。

『ハックルベリー・フィンの冒険』をお薦めする。この本を私は戦争中から翻訳でくり返し読んでいたのだったが、その後、大学の入試準備のために通っていた松山の図書館で原典を発見した。それからというもの、勉強時間を削って原文で少しずつ読み進めていったのである。そのために大学に入るのが一年遅れてしまったのだが。

根底に明るさがあり将来への希望がわき上がってくる物語であると思う。ぜひ読んでみてほしい。

以上

*表記をできるかぎり正確にするために、以下を参考にさせていただきました。

- 『あいまいな日本の私』大江健三郎 岩波新書
『「伝える言葉」プラス』大江健三郎 朝日新聞社
『人生の習慣』大江健三郎 岩波書店
『加藤周一著作集 5 日本文学史序説 下』平凡社
『加藤周一著作集 6 近代日本の文学的伝統』平凡社
『日本文化における時間と空間』加藤周一 岩波書店
『存在することの習慣』【フラナリー・オコナー書簡集】
サリー・フィッツジェラルド編 筑摩書房
『神を待ちのぞむ』シモーヌ・ヴェイユ 勁草書房



講演前に、大江健三郎氏にインタビューする生徒たち